

山口国文

第 47 号

関 一雄先生 追悼号

卷頭言	森野正弘	1
<hr/>		
関 一雄先生著作目録		3
<hr/>		
関一雄先生の思い出	岩野訓子	9
故 関一雄先生へのお便り	檜原葉子	11
関先生の思い出	二階堂 整	12
関先生の思い出	田中(石井)敦子	14
関一雄先生をお偲びして	小野美典	15
<hr/>		
「勘解由小路」再考		
—— 関一雄先生からの宿題に答えて ——	勘解由小路承子	19
擬古物語の漢語動詞の特質		
—— 『源氏物語』 との比較による ——	柚木靖史	35
奈良・平安・鎌倉時代の和文作品における感情形容詞の多義の実態について		
	安本真弓	55
『浄瑠璃御前物語』十六段本考	紀実歩	69
毛利敬親の歌集『露山集』覚書		
—— 成立の問題と歌から窺われる敬親のまなざし ——	小野美典	79
金子みすゞと中原中也のリレー朗読会		
—— 実践報告と今後の可能性・問題点 ——	林 伸一	106 (1)
<hr/>		
トーク・ルーム		
大学における日本語・日本文学教育の役割	徳永光展	107
<hr/>		
学会彙報／会員消息／執筆者紹介／委員名簿／編集後記		

巻頭言

令和五年六月十九日、本学会の発展に長らくご尽力いただいた関一雄先生がご逝去されました。享年八十九歳でした。衷心より哀悼の意を表します。本学会には最近まで関先生のご著書やご論文が度々届いていたこともあって、突然の訃報に接し、事務局一同驚きを禁じえませんでした。急遽編集方針を見直し、関先生のご生前のお人柄を偲ぶべく追悼号を編むことといたしました。短い期間にもかかわらず、原稿をお寄せくださった方々にはこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。

関先生は、昭和三十二年に東京学芸大学をご卒業後、東京教育大学大学院へお進みになり、昭和三十六年四月、山口大学にご着任されました。以来、三十七年間、文学学部、人文学部の国語学教官として教鞭をお執りになり、多くの学生たちをご指導されました。また、一時期は関先生お一人の体制であった国文科の専任教官を、国文学二名、国語学二名へと増員し、国語国文学研究室の礎を築かれるなど、より良い教育環境の整備にもお力を注がれました。平成十年三月に山口大学を定年でご退職された後は梅光女学院大学（現・梅光学院大学）に籍を転じられました。平成二十六年三月に同大学をご退職されるまで、都合五十三年間の長期にわたって大学教員としての人生を歩まれたことになりました。そのご功績に対し、平成二十六年度春の叙勲において瑞宝中綬章が授与されました。また、令和五年七月二十六日には正四位が追贈されております。

関先生のご研究は中古語を対象とするもので、特に語彙に関して精力的にご論考を重ねておられます。最初のご単著となる『国語複合動詞の研究』（笠間書院）を上梓されたのは昭和五十二年のことで、その年の佐伯国語学賞を受賞されました。以後、平成五年に『平安時代和文語の研究』（笠間書院）、平成二十一年に『平安物語の動画的表現と役柄語』（笠間書院）と、十六年毎にご単著を刊行され、最後のご単著となる『現代語訳で読み直す「竹取物語」』（笠間書院）は十年後の令和元年に刊行されました。第一著書で標榜された複合動詞を見つめる視点は、必然的に接頭語や接尾語をも視野に入れてのご研究へと発展し、そのご成果が第二著書としてまとめられました。今、「成果」という言葉を使いましたが、それらは新たな問いとしての側面を多分に含んでおります。複合動詞や、あるいは接尾語によって動詞化、形容動詞化した語が、なぜ物語・日記類に多く散見されるのかという問題意識のもとに、第三著書ではその解として「動画的表現」という概念が生み出されます。他にも、漢文訓読語が会話文に用いられている点に着目するところから「役柄語」という概念が提唱され、これらの概念の実践として第四著書が執筆されました。そして、ここでもやはり、「けり」や「侍り」をめぐる新たな問題が提起されることになっております。こうして概観される関先生のご研究に一貫してうかがえるのは「物語の言葉とは何か」という問題を追究し続けるご姿勢です。和歌とは異なる言葉の生成の在りようを、私たちは関先生のご著書を通して知らされることになるのです。

なお、私自身は関先生の警咳に接する機会を逸してきたこともあり、本来、このような文面をしたためる任にございませんが、現在、学会代表の和田学先生が体調を崩されて療養中のため、代わって務めさせていただきます。何とぞご容赦ください。

（森野正弘）

投稿規定

- 一 内容 日本語学、日本文学、日本語教育、国語教育に関する研究論文
- 一 枚数 四百字詰原稿用紙三五枚以内
- 一 期日 二〇二四年九月三〇日
- 一 送り先 〒753-8540 山口市吉田一六七七一
山口大学人文学部

日本・中国言語文学コース研究室内
山口大学人文学部国語国文学会

※本誌に掲載された論文等の著作権は著者に帰属するものとする。ただし、山口大学人文学部国語国文学会は、本誌に掲載された論文等を、学会もしくは学会が委託する機関において、電子化公開する権利を有するものとする。

山口国文 第四十七号

二〇二四年三月一日 発行

編集 山口大学人文学部国語国文学会
発行 代表者 和田 学

〒753-8540 山口市吉田一六七七一

山口大学人文学部
日本・中国言語文学コース研究室内
電話 (〇八三)九三三-五二七二(和田)
口座振替 〇一五四〇-一五四八六

印刷 有限会社 三共印刷